留学状況報告

１２月３日
岩手大学教育学部４年
和野　彩月
留学先：オーストラリア

〇学校における実践

オーストラリアでは今が年度末であり、11/15 に Year１２の生徒が卒業、各教科でテストがあり、11/29 が授業最終日というスケジュールで、慌ただしく長期休みに向かうため生徒がなかなか落ち着かない月でした。

前回の報告では、ICT を取り入れることで支援の一つになっているということを述べましたが、ICT の難しさについても考えさせられました。パソコンを使ったタスクに喜んで取り組める生徒もたくさんいます。教師よりも巧みに使いこなし、プレゼンテーションに BGM を挿入したり、ビデオのように流すためのセッティングをしたり、アニメーションを自分で作ったりと驚くような技術を発揮していました。日本では携帯電話やパソコンの予測変換機能により、漢字の識字はできても書けないということが起こっています。それが英語圏ではスペリングの問題として発生します。彼らは漢字テストの代わりにスペリングのテストがあります。驚いたのは、いつもパソコンで文章を作成していますが、たまにノートに書いた時にスペリングがでたらめであったり、”NeeDeD”のように大文字小文字交じりの生徒がいたりしたことです。書きの指導では紙に書くこともしていくことが必要だと感じました。また、ネットに繋がっているため、関係の無いサイトへのアクセスも容易です。これから日本でも ICT がどんどん取り入れられるようになるでしょう。教師側のパソコンで強制的にコントロールすることもできますが、それをしないだけの分別や自制心を生徒に求め、また、生徒が授業に夢中になるような良い授業作りを教師に求めたいと思いました。そして、パソコンの充電が１日中保つわけもなく、充電がなくなりそうになると授業中に充電をする必要があります。それが立ち歩きに繋がる上、壁際に移動しなければならなかったり、延長コードで床が混雑したりと煩わしさが出てしまいます。

英語の授業で Year7,8 の生徒と、日本語の授業で Year7~12 の生徒と関わりました。日本と同様学年が上がるほど落ち着いていきます。Year7,8 の生徒は授業に集中して取り組むことが難しいです。私語や立ち歩きが多いことに驚きます。忘れ物が多いことに驚きます。自分の出したごみを自分で捨てず、自分が借りた教室の備品を返していかないことに驚きます。今感じるのは、「環境に合わせて人は育つ」ということです。クリーナーの方がいるので、彼らは自分で学校の掃除をすることはありません。それゆえに「次に使用する人」という視点が無いのかもしれません。教室の端と端の人が会話をしたり、隣同士なのに大声で会話をしたりする様子もあります。「外から見た自分」を想像できていないのかもしれません。

クラスとは言っていますが、授業を受けるための単位であって、日常生活を共にする仲間という感じは日本よりもありません。インターナショナルの生徒は外国語の授業の時に ESL（English as a Second Language）という部門の方で英語の授業を受けます。「学級」という概念が日本よりも固定されていないために支援が必要な時に授業を抜けている生徒がいることが目立たないのかもしれません。

Year7,8 について、障害特性のある生徒にアプローチをするよりも先にクラス全体として成長し、落ち着きをもてるようにすることが必要かと思いました。立ち歩く要因の一つとしては消しゴムやテキストなどの忘れ物の貸し借りをするためということがありました。そのため、鉛筆、消しゴム、テキストを貸し出すことでその立ち歩きはなくなりました。ゴミや机椅子の整理整とんについては、授業終わりに生徒に声を掛け、やってもらうようにしました。これが自主的な行動に変わればいいなと期待します。自分の課題に取り組まず、特に何をするでもない生徒もいました。そんな生徒は近くに寄って留まると意外にも質問を沢山して課題に前向きになります。近くにいてもリアクションの無い生徒についてはこちらから質問を重ねていくと反応を返してくれるので、結果課題が進みます。中学生の理想からはかけ離れた姿に見えますが、段階を踏まなければできず、その段階が今まで組まれていなかったのだとすれば、彼らにとっては必要な手立てなのだと思います。学ぶことに怠惰に見えていても彼らに「できるようになりたい」という思いがあることそれを実現するための何らかの困難があることを見失わずに向き合いたいと思います。私語が氾濫することについてはまだ糸口をつかめていません。来年の新学期が勝負だと思います。明確なクラスルールの設定、座席の配置など先生方と相談をしながら進めていきたいと思います。

・卒業の日の写真。Kindy から Year11 の生徒までが敷地の通路を作り Year12 の生徒を見送りました。

・日本語の Year9 のクラスの生徒との写真。日本からの留学生が帰国するため、このメンバーでは最後の授業になりました。

〇生徒の進路について

1 年間留学をしていた日本人生徒が 2 人いました。彼らは日本の 3 学期からまた日本の学校に行きます。高校 2 年生なので、進路を選択する時期でした。進路について別々に話す機会があり、話を聞くと、2 人とも「特にやりたいことは決まってないけど、留学したから国際系かな」と話していました。それらは確かに彼らの思いの一つでもありましたが、大部分は周りの大人にそう期待されているというのがありました。周りのトビタテ生を見ると、留学目的がダンスだったり音楽だったり観光業だったり建築だったりします。国際系の学科がない農学部や理工学部でも留学プログラムがあります。留学したから国際系というのは安直ではないでしょうか。留学は色々なものを広げてくれると思っています。広がるものの中には選択肢も含まれます。留学によって選択肢が広まるはずが、「留学したからこれ！」と逆に狭めてしまっているのは勿体なく思います。英語はあくまで手段であります。英語は言葉だから、なんでもできるよ、そして日本語でできないことは英語でもできないよと伝えました。英語を生かした職として企業の海外進出に携わるとする。英語が上手にできたとして、今すぐ交渉できるでしょうか。何をするにも同じだと思います。「英語ができます！」「で、何ができるの？」というのをもっと考えなければなりません。母語でこれができる。そして、同じことをできるだけの英語力がある。だから相手が英語話者にまで広まる。というプロセスなのではないでしょうか。

国際系、大いにいいでしょう。ただ、「国際」というのは、世界に土俵を広げただけでどの分野で攻めるか、何も決まってないのではないでしょうか。ひどく曖昧に感じます。

最後はきちんと時間が取れず、お手紙になってしまいましたが、あなたは自由で何でもできる、ということを伝えました。とっても素敵な子達だったので、彼らの進路が楽しみです。